第Ⅳ部門　　アウトドア活動を通じた自然体験が倫理観に与える影響の研究

京都大学工学部地球工学科　学生員　○中原　雅文
京都大学大学院工学研究科　正会員　　藤井　聡
京都大学工学院工学研究科　正会員　　川端　祐一郎

１．研究目的

ここ数年，“アウトドアブーム”という言葉と共に，キャンプやアウトドアスポーツなど，自然を活用した活動がメディアや雑誌，SNS で話題となっている．さらに，2020 年からは新型コロナウイルス感染症の影響により，「密」を避けるレジャーとしてアウトドア活動はより一層注目されるようになった．

アウトドア活動の活発化が社会にもたらす影響については，生活環境や自然環境の変化といった，物理的な変容からの考察はなされている一方, 参加者の「心理」の変容を介して社会に与える影響についてはほとんど検討されていない．

そこで本研究では，現在到来しているアウトドアブームが，我々の心理的側面を通して社会に良い影響をもたらし得るかを検証することを目的とする．

２．既往研究

自然と触れ合うことが人間の心理に肯定的な影響を及ぼすことは多くの研究から示唆されているが，その着眼点は主に「メンタルヘルス効果」と「青少年への教育効果」に限られている．

一方で東原は，日本で伝統的に育まれた自然観は日本人の宗教意識と密接に関連しており，自然体験が自然に対する「畏れ」のような宗教意識を刺戟する，と指摘しており，同様の指摘は他にも多く見受けられる．この自然に対する「畏れ・謙虚さ」といった感覚は，日本人の宗教意識のベースであり，その感覚は倫理観のベースでもある，と考えられる．

以上から，本研究では，「アウトドア活動を通じた自然体験が，自然に対する“畏れ”のような，日本人の宗教意識を刺戟することを通して倫理観を涵養する」という仮説を設定し，その効果の有無や程度を明らかにすることを目指す．またその際に，日常での宗教概念の経験といった，宗教文化が及ぼす効果にも着目する．

３．研究手法

前述したプロセスから，以下の理論仮説を設定した．

1. 自然に触れるアウトドア活動の経験をより多く持つ人ほど，宗教意識が強い
2. 子どもの頃に宗教的概念（“神や霊”，“お参り”など）を教わったり経験したりしたことが多い人ほど，仮説 1 の効果が高まる
3. 宗教意識が強い人ほど，高い倫理観を持っている

これらを検証するために，Web アンケート調査を実施した．調査項目は個人属性，各種アウトドア活動の活動頻度，仮説検証に用いる各種尺度である．アウトドア活動の種類については,「キャンプ・グランピング」「登山・ハイキング」「海遊び・川遊び」「釣り」「動物や植物の観察」「サイクリング・ツーリング」「スキー・スノーボード」とし，それらの年平均回数の加算平均を「アウトドア活動度」とした．

幼少期に宗教的概念を経験した程度については，日本の一般的な家庭で触れる宗教的概念・行事を 7 つ取り上げ，子どもの頃にどれだけそれらについて教わったり経験したりしたかを尋ねた．尺度名は「幼少期の宗教経験」とした．

次に，宗教意識を測る心理尺度については，宗教意識尺度から「神仏の関与的存在」「宗教肯定」「自然・神秘」，自然観尺度から「自己の存在様式」，科学観・自然観尺度から「人智を超えた自然」を使用した．本研究では，前述した

Masafumi NAKAHARA, Satoshi FUJII and Yuichiro KAWABATA
nakahara.masafumi.86c@st.kyoto-u.ac.jp

宗教意識各尺度のうち，前2つを「宗教観」，後ろ3つを「自然への“畏れ”の感覚」とした．

最後に，倫理観を測る心理尺度については，「大衆性尺度」と「間人度尺度」を用いた．

以上の尺度において，いずれも一定程度以上の信頼性が得られたため，加算平均によって尺度得点とした．

４．分析結果

仮説を検証するにあたり，仮説に沿うような因果モデルで共分散構造分析を行った．構造方程式の推定結果から得られたパスダイアグラムを**図１**に示す．適合度の各指標を見るに，モデルの妥当性は十分である．

「アウトドア体験度」からは，標準化係数の絶対値は小さいという点に留意は必要だが，「自然・神秘」「自己の存在様式」に対して，正で有意なパスが観測された．従って，仮説1に関しては，宗教意識のうち「自然への“畏れ”の感覚」について支持される結果となった．一方で，交互作用項からは，有意なパスは確認されず，仮説2を支持する結果は得られなかった．しかしながら，「幼少期の宗教経験」からは宗教意識の「人智を超えた自然」以外に正で有意なパスが観測され，幼少期に宗教概念を経験することは，長期に渡って宗教意識を涵養していることが示唆された．

宗教意識から「大衆性」へは，「神仏の関与的存在」からは正，それ以外からは負で有意なパスが確認された．一方，「間人度」へは，「自己の存在様式」から正で有意なパスが存在した．仮説 3 については，部分的に支持される結果となった．

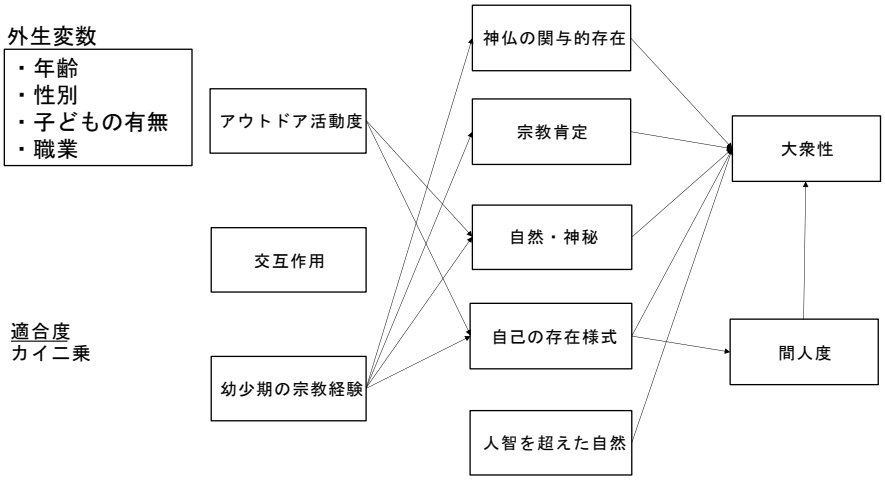

図１　パスダイアグラム

５．結論

分析結果より，「アウトドア活動への参加は，自然への“畏れ”の感覚を刺戟し，当人の倫理観を涵養する効果を持つ」ことが示唆され，本研究で設定した仮説 1，3 はある程度支持される結果となった．また，仮説 2 で想定した交互作用は観測されなかったものの，「幼少期に宗教的概念に触れた経験が多い人は，当人の宗教意識及び倫理観を長い間涵養している」ということが示唆された．

以上から，地方自治体を中心としたアウトドア施設の建設や，自然と触れ合えるように工夫されたまち作りが，現代日本人の自然観の回復及び倫理観の向上に有効的であることが実証的に示唆されたと考えられる．また，幼少期に宗教概念に触れることの重要性が示唆されたが，公的教育機関での宗教教育が制限されている日本において，宗教情操教育について積極的な議論が展開される必要があるだろう．

---

[1] 井戸聡：アウトドアブームの環境社会学的考察:自然認識の構造を手がかりとして，京都社会学年報, 7, 81-100，1999.

[2] 東原昌郎：自然観と野外活動に関する一考察，東京学芸大学紀要 第5 部門 芸術・体育, (36), p175-182，1984.